会員番号 440 松森 且洋

クロッキー会への誘い

CDAのクロッキー会で鉛筆画をやっています。クロッキー会への出席率といえば半分くらいでクロッキー会への誘いなどというおこがましい言葉を使ってしまいました。実はこのクロッキー会、深いんです。月に一度のこのクロッキー会での2時間は、緊張感に包まれた雰囲気のなかで見たままを感じとりクロッキー帳に画き写す、という自分磨きのようなものと思います。毎回新鮮な気持ちで、真摯に、真剣にうちこむことができる場でもあり、合否のないクロッキーの試験を受けるようなものと思っています。あくまで私の感覚です。

　このクロッキー会の時間の流れですが、おおよそ2時間のなかで、モデルさんのポーズ別に、10分ポーズ 6回、5分ポーズ4回の間で10枚ほどの絵を描き上げるというものです。

私のクロッキーのレベルは出席率からもわかりますが、絵を描上げるというほどのものではなく数をこなして様子がわかる程度で、数をこなすうち1枚は描きあがる程度です。

とはいえ上達するよう頑張ってます。うまく描くためのコツなどはなかなか身につくものではなく、そのうえ自分はこり固まった画き方なので、わからないことは先生やベテランの方に教えてもらうこともありますし、鉛筆、パステル、クロッキー帳など、使いやすいものを聞いたり、気軽に絵をみせていただいたりています。でも他の人の絵をみるのは美術館で展示される絵画を観るときの姿勢なんですよ。

　クロッキーの絵が仕上がる過程は感覚的ではありますが、短い時間でアイデアを迫られている、そんな感じでもあります。これも個人的見解ですが。

そして、モデルさんがポーズをつくるとはじまります。皆いっせいに描き始めます、そのなかで難しいポーズがあります、でも絵は描きあがります、描きこむこともあれば、サラサラっと出来上がることもあります。ですから描いてみなければわかりませんね。

　絵を描くにあたってはおしゃべりしながらできるといいのですが、そんな雰囲気はありません。たぶんですが書道と同じように、作品を書くときは一気にさらさらとか、力強くとか、そんな雰囲気の中ひたすら描き続ける、そこには魂と言うか何か込められたものがあるのかもしれませんね。

アナログのよさというのか、もしこれを人工的に機械や人工知能でやるならおそらく3Dプリンターで作ったような、写真を撮ってアプリで加工して出来上がった絵になるのでしょう。

その人の見たままの絵を描く、思い描くから絵にあじが出る、上手く描きたいそう思ってもなかなか思うように描けないのがこのクロッキー会という実践の場です。だからこそ、そこに魂だったり、美しく感じるものがありいい絵が出来たりする。しかも参加者全員の描く人の構図が違えば描くポーズも変わってくるので、同じ絵になることもありませんし出来上がった絵は文句のつけようもない唯一の作品といえるのです。慣れてくると隣の人の線の描き方や濃淡をつけるときの鉛筆やパステルの音が、程よい緊張感をつくりモデルさんの美しいポーズと相まって、自分の描く鉛筆の線がアウトラインをなぞるように描いていく。モデルさんをみたままに描くわけですが、自分のクロッキー帳に美しく描きあげけた時は、最高のひとときですよ。

月に一度の2時間、一緒に自分磨きをしてみませんか。

松森 且洋 中部デザイン協会 会員

1970年 名古屋市生まれ
2008年 放送大学卒業
1993年 国際刃物デザインコンペ'92inSAKAI優秀賞